

<特集>

1960～70年代の英米文学翻訳観
— 『英語青年』と『季刊翻訳』の共振と乖離 —

Discourses on Translation of English Literature in the Scholarly Magazine *Eigo-Seinen*
in the 1960 - 1970's

佐藤 美希

Miki Sato

(札幌大学)

(Sapporo University)

Abstract

Translation of English literature in Japan has been driven mainly by English literary studies. *Eigo-Seinen* (1898-2013), a scholarly magazine of the discipline, carried various discourses on literary translation, most of which were based on an academic attitude toward the source text. It was in the 60's and early 70's when the discourses came to focus on reader-oriented and practical approaches, which prompted a rise of interest in translation for its own sake. These approaches were common with *Kikan-Hon'yaku* (1973-75), a magazine featuring the theory and practice of translation. Sato-Rossberg (2014) considered this magazine as a catalyst for Translation Studies in Japan, to which *Eigo-Seinen* in the mid-70's might have contributed. However, in fact *Eigo-Seinen* then ceased to express continuing interest in translation. This paper will analyse discourses on translation in *Eigo-Seinen* from the 60's to the early 70's and discuss how the scholarly interest in translation was constructed and diminished in the magazine.

1. はじめに

翻訳大国と称される日本においては、主に明治以降から現在に至るまで膨大な数の翻訳論が発表されてきた。一方、1970年代にヨーロッパで登場して以降、欧米を中心にアラビア語圏や中国語圏も包含しながら発展してきた翻訳研究(Translation Studies — 以下 TS)では、学問研究として翻訳を考察するという視座から様々な理論や事例の研究が行われている。日本の翻訳論と TS の関係については、21世紀に入って TS が日本のアカデミズムに徐々に紹介されるまでは翻訳を学問的に追究する TS の視座を共有してこなかったという見方がこれまでは一般的であったろう(e.g. 水野 2007, p.1; Takeda, 2012, p.15)。日本における英米文学の翻訳を TS の観点から考察することを研究テーマにしてきた筆者も、日本においては TS のように一つの学問分野として翻訳を扱う体系的な研究姿勢の確立は近年まで見られないと考えてきた。

しかし、佐藤=ロスベアグ・ナナが論文「共振と呼応——1970年代日本における Translation

Studies の芽生え」(2014)において、1973年から75年まで刊行された『季刊翻訳』という雑誌には現在のTSと類似した観点からの翻訳論が提起されており、日本のTSとも言うべき研究の萌芽があったことを指摘した。佐藤=ロスベアグによれば、同誌が掲載した翻訳に関する様々な論考は、日本の文脈における学問的な翻訳の議論を志向するものであって、そうした議論が日本のTSとして西欧と同時期に展開していく素地があったものの、同誌は75年の第7号までしか出版されず、何らかの原因でその進展は止まってしまったのである(*ibid.*, p. 11)。

『季刊翻訳』における翻訳論考の射程は多様な言語・ジャンルに及ぶが、ここで英米文学の翻訳をめぐる言説に目を向けると、例えば英米文学研究の代表的な学術雑誌である『英語青年』(詳細後述)においては、1960~70年代にかけて翻訳を学問的に捉えようとする論考が掲載されており(佐藤 2008a; 2008b)、『季刊翻訳』との共通性を見て取れる。しかし、『英語青年』に見えていた翻訳への学問的関心は『季刊翻訳』創刊と同時期の70年代初期で途絶えてしまう。この点について筆者は、日本の英米文学研究の分野では翻訳の研究が学問として体系化されずに散発的な関心に留まった事例と捉えていた。しかし佐藤=ロスベアグの論点に立てば、ここで着目すべきは学問的な視座が生じたにもかかわらずそれが体系化されない状況に至る流れ、つまりTSと共通する視座の翻訳論が当時の英米文学研究内部に現れながらもその進展が中断してしまう経緯や背景はいかにして生じたのかという点になろう。その様相を検証することは、本稿では英米文学の翻訳という一分野に限定するものの、日本の文脈における翻訳論とTSの接合を検討していく一助になるのではないか¹。そこで本稿では、60~70年代の『英語青年』に表れる翻訳言説の内容と背景を検証し、英米文学の翻訳に関わる学問的な翻訳論の端緒とそれが中断される流れをたどる。

2. 『英語青年』と日本の英米文学

明治以降の日本における英米文学においては、ロシア、フランス、ドイツといった各文学と並び、積極的な翻訳受容が続けられてきた。明治中期に東京帝国大学をはじめとする高等教育機関で英米文学が教授されるようになって以降、翻訳受容の中心は、研究・翻訳・批評を通じて英米文学研究というアカデミアが担うこととなる²。

そうした英米文学アカデミズムの研究態度や翻訳観を端的に示してきたのが1898(明治31)年に創刊された雑誌『英語青年』である。創刊当初は『青年 *Rising Generation*』というタイトルで、「日本人の利益、知的発展、國の繁栄促進」のために英語の普及と日本人の英語力養成を創刊の目的とする(第1巻1号 p.3)語学雑誌に過ぎなかった。しかし、次第にその内容は研究者の寄稿によって英語英文学研究関連の要素が色濃くなり、編集にも著名な研究者達が携わる³など、同分野を代表する研究雑誌として確立していった。日本における英語系の専門雑誌としては最も歴史が長く、第二次世界大戦中には英語関係誌の多くが休刊を余儀なくされた中で、もう一つの代表的な研究雑誌であった『英語研究』と1944(昭和19)年に合併したものの継続し、1948(昭和23)年に再び『英語青年』として単独刊行となる。その後、2009(平成21)年にオンライン化、2013(平成25)年に休刊となるまで115年にわたって英語英文学の研究者達が執筆・購読する月刊研

究雑誌として知られてきた⁴。本稿が考察する 1960～70 年代においても、同誌の地位は揺るぎないものだった。1968 年から 69 年にかけて出版された、日本の英学の歴史を克明に記録した『日本の英学 100 年』では、「この雑誌[『英語青年』]を紹介することは、日本の英語英文学を紹介するのと等しく、どんなに紙面があっても足りない。」(『日本の英学 100 年 昭和編』p.439)と形容されている。

このように英米文学研究を代表する研究雑誌であった『英語青年』には、作品論や作家論といった文学研究の中心的主題による論考の他に、翻訳についての記事や書評も頻繁に掲載されてきた。同研究分野の中心的な雑誌としての同誌の位置づけから見れば、そこに登場する翻訳言説は、英米文学研究というアカデミズムが持つ一つの代表的な翻訳観と考えられる。それがどのように論じられているかを分析することで、英米文学研究が持つ翻訳への態度を抽出することができるだろう。以下では実際に『英語青年』に掲載された翻訳言説を分析しながら、当時の英米文学翻訳をめぐる思考や翻訳を学術的に論じようとする傾向を検証する。

3. 1960～70 年代の『英語青年』における翻訳言説

3.1 旧来の翻訳言説

明治以来、膨大な数の英米文学作品が翻訳されるとともに、『英語青年』においても様々な翻訳論が提示されてきた。戦前・戦中まで、その翻訳論の多くは原文テキストに書かれる異言語や異文化をいかに変換・訳出すべきかという問題を中心に据えており、直訳／意識の二項対立的議論や誤訳指摘につながっていた。これは、明治の近代化政策以降、欧米列強に比肩しようとする当時の社会状況を背景として発展してきた英米文学研究が、欧米の思想を理解しそれに追従あるいは対抗しようとするために、原典を忠実・精確に解釈することを目的とする、極めて起点文化・起点テキスト志向の研究観を持っていたことと呼応する(佐藤 2006; 2008a)。だが、そのような起点文化志向で原典への忠実さを主眼にする翻訳論の多くは、原文テキストから翻訳テキストへの言語・文化の変換の在り方をめぐるテキスト論の枠内にとどまり、印象論や経験論に基づいてその変換の善し悪しの判断・規定を行おうとする議論が中心となる傾向があった。その一方で、戦中の『英語青年』にはそうした規定的立場の翻訳観とは一線を画して翻訳の芸術性に目を向ける翻訳観も登場し、忠実さを重視する立場との間で論争も行われた⁵。しかし、敗戦後に米英の民主主義思想の受容に傾倒する中で、再び原文の精確な理解を研究が担うべきという意識から、そうした文学研究の成果としての起点文化・テキスト志向の翻訳観が支配的となっていったと考えられる(佐藤 2008a; 2008b)。

3.2 研究主導から一般読者へ

そうした『英語青年』誌上の翻訳論の傾向に変化が見られるのは、1955(昭和 30)年である。同年 101 巻において、研究者である佐伯彰一の手になる英文学翻訳をめぐる、評者宮崎孝一と訳者佐伯の意見が『英語青年』誌上で交わされた。佐伯は、宮崎が「綿密丁寧に」訳文の不備や誤訳を指摘したことや一般向けの文体を不満としたことについて、「英文学の翻訳が日本でとかく

“招かれざる客”になり勝ちな理由がいわば裏側から嗅ぎとれた氣さえした」「一般の文学読者が英文学に対して覚えている距離感は廣くかつ深い」と述べ、一般読者が英文学に対して覚えている距離感を払う「懇切な interpreter」としての翻訳が必要であると主張する(「書評の役目—宮崎孝一氏に」101 卷 2 号 p.129)。それに対し評者の宮崎は、「言葉の脱落、歪曲された語法」などが一般読者に対する翻訳だからといって許されるべきではなく、そのような不正確な訳を歓迎するような読者は存在しないと反論している(「佐伯彰一氏に」101 卷 3 号 p.129)。

佐伯と宮崎のやりとりから見えてくるのは二つの正反対の翻訳観である。すなわち、厳密に原典を理解するべきという文学研究態度に基づいた言語学的に精確・厳密な翻訳を提供すべきであるとする翻訳観(宮崎)と、そうした研究ベースの翻訳姿勢が一般読者と乖離してしまっているという危機感を持ち、研究志向ではなく一般読者を対象とした翻訳態度に近づけようという翻訳観(佐伯)である。両者ともに英米文学研究に携わった人物だが⁶、その中から佐伯のような研究ベースではなく一般読者を志向する翻訳観が示されるのは、少なくとも文学研究主導の翻訳観が多く表れていた『英語青年』誌上ではかつて見られなかった視点である⁷。

こうした一般読者の存在を強く意識した翻訳観は、やや時間を経るものの1960(昭和35)年頃から度々『英語青年』に現れる。同年106巻に、昭和の英米文学研究を牽引した著名な研究者である中野好夫が日本英文学会シェイクスピア祭に行った「シェイクスピア翻訳の思い出」と題する講演の速記録が掲載されており(106 卷 8 号 pp.394-396)、その中で中野は「研究のための、あるいは研究成果としての翻訳」とは異なる「一般読者を対象とした翻訳」の存在について言及し、それを意識するならば翻訳の日本語が問題になると述べる。佐伯や中野が着目した「一般読者を対象とした翻訳」とは、端的に言えば、一般の読者にとって読みやすい、作品が読者に伝わりやすい訳文ということである。

旧来の『英語青年』誌の翻訳言説で数多く指摘されてきた“誤訳”についても、まずは“読みやすさ”を達成してから考えるべき問題であるという見解が登場する(「片々録—英学時評」1962(昭和37)年108巻11号 p.650)。この記事は、文学以外の分野の翻訳に“読みやすさ”が欠けていると指摘した上で、「英米文学の作品の翻訳は近年目ざましく活發で、こちらの方の水準はかなり高く、今ここで問題にしている[他分野の]翻訳とはどうい比較にならない」と述べ、英米文学の翻訳においては“読みやすさ”は自明のことであるという認識が示されている。“読みやすさ”が自明だという理解が正当かどうかはともかく、誤訳の淘汰よりも“読みやすさ”の実現が重視されているのも、従来からの文学研究主導の翻訳観とは異なっている。

“読みやすさ”に欠ける訳文について、起点文化志向で忠実・精確に訳すことを良しとしてきた研究主導の翻訳の弊害と捉えた意見も掲載されている。

……日本では、訳文の日本語がわからなくても、誤訳にはしばしば神経質になるが、日本語の悪文をあまり問題にしない。かえって読む方の頭が悪いか、原書がよほど高級なんだろうぐらいに思う人がいる。長いあいだ西洋文明に頭を下げてきた人間の劣等感がこんな所にまだ残っているのかもしれない。(「編集後記」1965(昭和40)年111巻9号 p.642)

ここでは、一般読者のための読みやすい翻訳と、忠実な理解を求めるあまりに「悪文」を生産し続ける「西洋文明に頭を下げてきた」英米文学研究に立脚する翻訳とが対置され、後者が批判的に捉えられている。英米文学研究を代表する雑誌の編集者自らがこのような認識を持っているということは、それまで英米文学の翻訳を研究の立場から主導してきた英米文学研究自体がその立場を自省し、研究主導の姿勢以上に一般読者に向けた“読みやすさ”を重視する姿勢が定着してきたと見なすことができるだろう。

このような一般読者を念頭に置いた“読みやすさ”という観点は、ターゲットとする読者像を区別し、翻訳の目的によって翻訳の仕方が変わるという論点へと向かう。この論点は TS で議論されるテキストタイプ論やスコpos (skopos) 理論⁸、あるいはチェスタマン (Andrew Chesterman) が提起した、読者が翻訳に何を期待しているかを翻訳の一つの規範と見なす規範論 (Chesterman, 1997) などとも視座を共有するものだろう。

「翻訳」はその目的によって区別されねばならぬいくつかの面があるということである。[中略] もしも一般読者層を目標としての翻訳であるならば、外国語を知らぬ一般読者である日本人に何らの抵抗をも感じさせないような表現、つまり翻訳文とはとても感じられない文体でなければならない。[中略] そうした意味での翻訳での重要性は、辞句ではなくしてそこに醸し出されている雰囲気を読みによって正しく捕らえられたものを過不足なく第二の言語特有の言いまわしに頼って再現してみせることである。そこに翻訳者としての技術と能力とが要求される。言語の言いまわしに捉われる必要はない。所詮翻訳はその意味で創作である。

(新島通弘「翻訳論」1968(昭和43)年114巻3号 pp.154-155)

新島は、目標とする読者層によって翻訳の在り方は異なると述べ、中でも一般読者を目標とする翻訳に焦点を当てている。そのため、彼の翻訳観は、まず読みやすい翻訳であることを重視している点、辞句より雰囲気の再現に重きを置いている点、そして翻訳が創作であるという認識を持っている点において、起点テキストを尊重する研究のため／研究成果としての翻訳という観点とは異なっている。

1970(昭和45)年に掲載された「最近の翻訳について」と題する座談会記録にも、翻訳と研究制度の関係の変化が見て取れる。座談会への出席者は英文学研究者の石井正之助と小田島雄志、アメリカ文学から金関寿夫と福田陸太郎、英語学を専門とする安井稔の五名である。編集者側からは「翻訳の問題、あるいは翻訳書評の問題について」が会の主題として挙げられた。この座談会の中で、金関が興味深い発言をしている。

金関: ……外国文学研究が専門化した結果、それが大変アカデミックなものになって来た。
そして、それに出版社がついてきた——長い間。ところが最近[中略]翻訳者はや

はり大学の先生が多いけれど、編集者や一般の読者が要求を出すようになって来た。ぼくらが威張って翻訳して、そしてこれを読みなさいというふうに与えるんじゃないくて、一般の読者層からこんな本を読みたいという無言の要求が少しずつ出ている。それに対して訳す人も、大学の先生でも文学のセンスの強い人たちがやり出すというわけで、私はこれは非常にいい傾向だと思うんです。たしかに翻訳の質が向上してきている。だから自然に詩人や小説家が翻訳するという傾向が出てきていると思う。つまり翻訳が文学を取り戻しつつあると思うのです。

編集: 翻訳家が独立してきている。学者の余技というんですか、副業ではなくなっている・・・。

金関: ええ、半分くらいは creative な仕事としてね。[後略]

(「最近の翻訳について」1970(昭和45)年 116 巻 3 号 pp.147-148)

この金関の発言からは、一般読者(と出版社)の影響力の高さと、文学研究制度主導だった翻訳がその研究制度を離れていく状況を、研究者自ら肯定的に認識していたことがわかる。

3.3 言語学的な翻訳技術論への関心

翻訳観が次第に文学研究主導のそれから乖離していく様子は、翻訳実践の理論への関心が高まっていったことにも示されている。1970年代前半に『英語青年』に登場した翻訳観として指摘できるのは、英米で発表された言語学的側面から言語変換の実践を理論化する翻訳論に対して好意的な評価がなされていたことである。1964年に発表されたユージン・ナイダ(Eugene Nida)による *Toward a Science of Translating* と69年に出版されたナイダとテイバー(Charles R. Taber)による共著 *The Theory and Practice of Translation* について、70(昭和45)年に飛田茂雄が「翻訳理論に期待しうるもの」という論考の中で採り上げ、ナイダの体系的な理論が翻訳の学として有益になりうるとして詳細に紹介している(116巻12号 pp.695-697)⁹。ナイダについては、同年の116巻3号の特集記事「座談会:最近の翻訳について」の中で、ナイダが来日した際に披露した翻訳論も紹介されている。*Toward a Science of Translating* は1972(昭和47)年に成瀬武史によって『翻訳学序説』として日本語訳され、出版直後の書評でその内容も好意的に評されている(「新刊書架」118巻3号 p.167)。

この他にも、1971(昭和46)年にはブラウアー(Reuben Arthur Brower)編『翻訳のすべて』、セイヴァリー(Theodore Horace Savory)著『翻訳入門』が『英語青年』で紹介されている(「新刊書架」117巻2号 p.109)。日本人による翻訳論に目を向けても、1973(昭和48)年に出版された中村保男『翻訳の技術』、75(昭和50)年の河野一郎『翻訳上達法』と別宮貞徳『翻訳を学ぶ』がそれぞれ書評に採り上げられており(1976(昭和51)年 121巻12号 p.34)、翻訳を技術論として論じることに対する関心が継続した。また、時期が前後するが、1970(昭和45)年116巻12号では「翻訳:理論と実践」と銘打った小特集が生まれ(pp.695-703)、研究雑誌である『英語青年』においてさえも翻訳の実践面に大きな関心が払われていることがわかる。ナイダらの議論が変形生成文法や

意味論などの言語学の成果を応用したものであったことも、当時の英語英文学研究者の関心を強く引きつけた理由であろう。こうした翻訳実践につながる技術論は、テキストの等価性をいかに実現するかだけに留まらず、その訳出の日本語表現をいかに向上させていくかを論じており、結果として一般読者にとっての“読みやすさ”の実現を目指したものとなった。

実践面が重視されれば、翻訳が文学研究の成果ではなく習得できる技術であるという認識が生まれるのは当然といえる。この時期に翻訳学校の設立や翻訳者認定試験の開始といった、英文学研究から離れたところで翻訳者の養成が進められたことも、この点と無関係ではないだろう。『英語青年』では、1972(昭和47)年、翻訳学校設立に関連して次のように言及されている。

……翻訳に対する見方が違ってきているということもある。以前はとくに文学作品の場合、原作者と翻訳者との間に恋愛関係にも似た親密さと傾倒とが存在しなくては、良しとしないような厳しさが、翻訳する側にもあった。自然、原作者と並んで翻訳者が重要視される。欧米では、翻訳者の地位が低く、その地位向上が世界翻訳家協会の目標の一つと聞かすが、わが国はまさにその逆である。しかし最近では翻訳界も欧米なみになったようで、だれが訳したかは余り問題にしなくなっている。翻訳は名人芸を尚ぶ職人仕事ではなく、その原理にさえ通じればだれにでもできる技術だと思われ出しているのである（「編集後記」1972(昭和47)年118巻1号 p.60)

また、1974(昭和49)年には「外国文学翻訳協会」が設立され、英米文学の“外国文学翻訳士”資格認定試験がはじめて実施された。この外国文学翻訳協会については次のように述べられている。

戦後急激に増大した科学技術文献の翻訳を質的に向上させるために設立され、翻訳士の養成や検定などを行っている日本科学技術翻訳協会の文学版とも言うべき、外国文学翻訳協会が発足した。会長には早稲田大学名誉教授の瀧口直太郎氏が就任、副会長には刈田元司・佐藤亮一の両氏が選ばれ、理事には田村隆一、新庄嘉章、鈴木重吉、児玉久雄の諸氏ら24名が名を連ねている。英米文学をはじめ各国文学の移植を質的に向上させ、すぐれた翻訳出版の企画や翻訳者の養成などの事業を実施していく方針という。

(「片々録—外国文学翻訳協会設立」1974(昭和49)年120巻8号 p.397)

協会についてはその役員級の立場に文学研究の学者たちの名前が列挙され¹⁰、研究制度の権威のもとに文学翻訳があることを強調するような意識も垣間見える。しかし、翻訳学校にしても翻訳協会にしても、翻訳者の養成や翻訳出版の牽引を事業として研究制度の外で請け負う機関が生まれ、「原理にさえ通じれば誰にでもできる技術」として翻訳が考えられていることは研究者たちに認識されている。

純粋な英語英文学の学問研究を主導してきた『英語青年』の裏表紙にも、1974(昭和49)年か

ら75(同50)年にかけて、翻訳学校の受講者募集広告(東京翻訳高等学院外国文学翻訳家養成コース)や、「翻訳技能テスト」なるものの広告、上述の外国文学翻訳士資格検定試験の告知広告などが頻りに掲載されるようになっていた。従来までは研究叢書などの専門書の出版広告が中心だっただけに、研究外部で行われる翻訳実践が研究雑誌の上でも存在感を増してきたことを窺い知ることができる。

3.4 70年代における翻訳論考の減少

上述してきたような一般読者を重視する翻訳論や言語学をベースとする実践的な翻訳技術論の他にも、60年代から70年代初頭にかけての『英語青年』には多様な観点からの翻訳論がいくつも掲載されている(表1「1960～70年代『英語青年』誌上の翻訳論考——翻訳書評や対訳、原作と翻訳の解説などは除外し、翻訳を主題とする論考のみに絞る)。上述の内容も含め、その内容は翻訳の対象読者の問題から言語学的な観点に立った意味論的なもの、ジャンルごとの翻訳、等価の定義に至るまで、様々な論点から学術的な議論が試みられていることがわかる。

[表1:1960～70年代『英語青年』誌上の翻訳論考]

年	西暦	記事タイトル	執筆者	巻・号・頁 (頁は巻の通し頁)	備考
昭30	1955	書評の役目—宮崎孝一氏に	佐伯彰一	101 巻 2 号 p.129	一般読者を念頭に置いて翻訳のあるべき姿を考える。
		佐伯彰一氏に	宮崎孝一	101 巻 3 号 p.129	一般読者にも正確な翻訳を提供するべき。
昭35	1960	詩の翻訳について	福田陸太郎	106 巻 1 号 pp.30-31	
		シェイクスピアの翻訳について	木下順二	106 巻 4 号 pp.170-171	
		シェイクスピア翻訳の思い出	中野好夫	106 巻 8 号 pp.394-396	
昭37	1962	(小特集)英語になった日本文学	土居、佐伯、近藤	108 巻 1 号 pp.80-86	『源氏物語』、日本の現代小説、『こころ』の英訳について。
		片々録—英学時評		108 巻 11 号 p.650	誤訳の問題はreadabilityを実現した後の問題である。
昭38	1963	翻訳における意味	橋口稔	109 巻 3 号 p.145	全ての翻訳は解釈である。意味の直訳は不可能。
		翻訳と意味の問題	石橋幸太郎	109 巻 5 号 pp.264-265	言語学の観点から、意味の誤訳のメカニズムに言及。
		戯曲の翻訳について	杉山誠	109 巻 11 号 pp.662-663	

		翻訳について〈アメリカ文学時評〉	高村勝治	109巻11号 pp.672-673	
昭39	1964	誤訳			言語学の観点から、誤訳・正訳とは何かを問う
昭40	1965	編集後記		111巻9号 p.642	誤訳指摘は、西洋文明追随、劣等感の表れ。
昭42	1967	私の翻訳論	朱牟田夏雄	113巻3号 pp.138-139	等価、文体に着目した翻訳論。
昭43	1968	編集後記		114巻1号 p.58	誤訳指摘の前に翻訳の本質を議論する必要性。
		翻訳論	新島通弘	114巻3号 pp.154-155	日本語と英語の特性の違いに着目した英日翻訳の考察。
		編集後記		114巻10号 p.706	現代小説の日本語訳出版の増加。翻訳でも言葉の壁を越えて伝わる文化の妙。
昭44	1969	解釈と翻訳との間—Robert Herrickを訳して	森亮	115巻1号 p.4	
昭45	1970	座談会：最近の翻訳について	石井、小田島、金関、福田、安井	116巻3号 pp.140-149	翻訳の問題、翻訳書評の問題が主題。読者、翻訳が研究から離れている、翻訳態度の問題など、広範囲な関心。
		(対談)外国文学研究と創造性	土居光知、外山滋比古	116巻第4号 pp.182-191	対談の最後で「翻訳と研究」との関係について語っている。文学と研究の距離が近い状況が理想とされつつあるという認識。
		翻訳の問題	N.R.T	116巻5号 p.293	Eliotの詩の仏訳から問題提起。セイヴァリーやワトソン、ドライデン、ポウプらの翻訳論に言及。
		(小特集)翻訳：理論と実践		116巻12号	
		翻訳理論に期待しうるもの	飛田茂雄	pp.695-698	「文学作品を翻訳する時、翻訳の表面構造を原作からどこまで離すことが許されるか」に着目。「言語学を基礎とした、基本的な翻訳技術の体系化」が翻訳理論の目的。
		翻訳学は可能か	郡司利男	pp.698-700	文法理論と翻訳理論の関係。言語構造が違っても言語は全て翻訳可

					能。Chomsky の影響。
		翻訳の効用	國弘正雄	pp.700-701	翻訳が現代日本語成立に果たした功績。日本になかった概念や観念が翻訳によって定着した。翻訳の効用は文体的な立場からだけでは見ない。
		英詩の定型訳—一つの試みについて	森亮	pp.702-703	ソネットを定型詩として訳す試み。
昭46	1971	翻訳評に答える—宮崎氏の「こだわり」をめぐって	平野敬一	117 巻 5 号 pp.320-321	学問研究の一環と翻訳を見なす宮崎の翻訳観と、一般読者を対象とする商業出版の要請との違い。学究の立場との感覚の違い。
		詩の翻訳について	前川俊一	117 巻 7 号 p.451	
昭47	1972	編集後記		118 巻 1 号 p.60	翻訳学校設立について言及
		Imitation という名の翻訳	森亮	118 巻 8 号 p.434	
昭48	1973	『季刊翻訳』創刊		119 巻 4 号 p.256	
		日本文学を英訳することについて	山田和男	119 巻 7 号 p.429	
昭49	1974	日本文学作品名の英訳をめぐって	斎藤襄治	119 巻 10 号 p.625	
		短歌英訳小考	釜池進	120 巻 8 号 pp.366-367	
		外国文学翻訳協会設立		120 巻 8 号 p.397	
昭50	1975	英学戯評：外国文学翻訳士	全顎連	121 巻 2 号 p.30	外国文学翻訳士認定試験の実施について皮肉を込めた“戯評”。
		シェイクスピア翻訳と地域差	安西徹雄	121 巻 3 号 p.123	

しかし、上記の表からわかるように、1970(昭和45)年をピークに『英語青年』誌上での翻訳論考の数は激減する。71年以降も、3.2で考察したように、表からは除外したがブラウアーやセイヴァーらの翻訳実践論の書評(1976年)などは掲載されているし、翻訳学校や翻訳協会設立については編集後記などを通じて言及され、また日本文学作品の英訳は注目されており、翻訳への関心が全く消えてしまったわけではないようだ。だが、60年代に見られたような様々な視点に立つ多様な翻訳論は影を潜めてしまった。

60年代に掲載された翻訳論に言語学に基づく論考が目立つのは、当時のチョムスキー(Noam

Chomsky) 言語学の発展が背景にある。70 年に顕著になるナイダやセイヴァリーらによる翻訳実践に関わる理論への関心の高さもその延長上であろう。翻訳実践技術の向上を重視することは、同時に、3.1 で論じたような一般読者にとっての“読みやすさ”の志向とも通底する。ただし、翻訳がそうした技術論として捉えられるようになったということは、換言すれば英米文学研究がその制度内で英米文学の翻訳を牽引してきた旧来の翻訳のあり方からは全く乖離したということでもある。過去の翻訳観が、原文テキストの理解においても、また原文の文学性や作者の創造性に至るまでも、忠実かつ精確、厳密に原文に対峙する研究姿勢を土台にしていたのに対し、翻訳を技術として捉える翻訳観は、あくまでも実践的なものであり、必ずしも英米文学研究の成果を要求しない。それに加えて、70 年代前半には民間の翻訳学校設立や翻訳資格試験の実施などによって研究制度の外部に翻訳者養成の門戸が広く開放されることになった。つまり、翻訳は研究の土俵ではなく実践の土俵で論じられるものとして認識されていたのではないだろうか。

4. 研究の主題から実践の学へ

1960 年代以降の『英語青年』に掲載されていた翻訳論考では、英語英文学研究者達が対象読者や翻訳の目的、言語学的観点などの視座に立ち、学究的な立場から翻訳の問題に目を向け始めていたことが窺えた。それが独立した翻訳の「学」を志向していたとまでは言えないとしても、現在の TS にも通底するような学究的な観点に基づいていたという点では、73(昭和 48)年に創刊された『季刊翻訳』の翻訳論とも共通する。それにもかかわらず、『季刊翻訳』が刊行されていた 73～75 年の『英語青年』誌では、3.3 で指摘したように、日本文学の英訳についてなどの限られた内容を除いて、翻訳論考の数は激減している。これは単なる偶然だろうか。

『季刊翻訳』の編集方針には、「〈広い意味の翻訳〉について、多角的な研究と情報の伝達を目指す専門誌」「……翻訳上の新しい仮説や大胆な発想の紹介、発表、あるいは翻訳技術の向上をはかることや、すぐれた新人の発掘など、『季刊翻訳』の果たすべき役割りと責任は重大」(第 1 号 p.222)と述べられており、掲載されている論考の内容を見ても翻訳の理論と実践の両者を包括した、まさに「多角的な研究」を目指していることが読み取れる。文化翻訳や比較文学にも関わる主題、翻訳思想なども論じられる一方、実践的な理論や語学教育との関連をめぐる論考、翻訳実践に現実に携わっている翻訳者からの寄稿も数多い。「翻訳技術講座」と題する連載もある他、翻訳書評においても相当に実践的・技術的な訳文評価がなされているなど、翻訳実践への貢献を強く意識した内容になっている。

この『季刊翻訳』創刊については『英語青年』でも言及されている(1973(昭和 48)年 119 巻 4 号 p.256)。「文芸作品だけではなく、人文・社会・自然科学の全ての分野での翻訳がますます盛んになりつつある出版界の状況を背景に、翻訳に関する研究と情報交換を目的」とする雑誌であることが明記されるとともに、創刊号の内容も詳細に伝えられている。『季刊翻訳』には『英語青年』の編集に携わっていた荒竹三郎や外山滋比古、ナイダの著書を翻訳した成瀬武史、他にも別宮貞徳、中村保男、河野一郎、吉武好教ら、英語英文学の研究者たちも多く寄稿している。例えば、外山とロシア文学者の内村剛介との対談記事「いったい誰のための翻訳か——翻訳の原点を求めて」

が『季刊翻訳』第3号(1973, pp. 2-19)の巻頭に掲載されており、そこで強調されているのは、翻訳とは「日本語しか知らない人のため」のものであって「専門家のためではない」ということである¹¹。こうした主張は、本稿3.1で論じたような『英語青年』上で60年代に断続的に登場していた翻訳観と通底する。外山は1951(昭和26)年から1963(昭和38)年まで『英語青年』に編集長として携わっており、その後も同誌への寄稿や対談特集記事への参加など、同誌との関わりは深い。同誌をよく知る外山にとって、「日本語しか知らない読者のための翻訳」という主張は既知の論点であったはずだ。それを考えれば、外山は過去の論を踏まえてこの主張を『英語青年』誌上で論じても良さそうなものだが、そうではなく、英語英文学研究の観点から離れて『季刊翻訳』誌上で持論を展開したのである。上に名を挙げた他の研究者達も、この時期の『英語青年』上には翻訳論を発表していない。

遡及的に見れば、研究者たちが学究的に翻訳を論じた60年代以降の『英語青年』での翻訳論と、翻訳を多角的に研究しようとする『季刊翻訳』は、翻訳への学究的な態度という点で共振していたと言えるだろう。しかし、研究者たちが翻訳を学究的に論じようとする中で、一般読者を念頭に置いた“読みやすさ”を求める翻訳観と翻訳実践に関わる理論への関心を高めたことが、結果的に英米文学研究主導だった翻訳への認識を変えることにつながった。同時に、翻訳はもはや文学研究が主導する専権事項ではなくなり、研究の外部で翻訳学校が翻訳者養成を担うという状況が現実に生じた。『季刊翻訳』がそうした状況下で創刊されたということが、研究者たちの中である種の棲み分けを生んだと考えられないだろうか。つまり、翻訳の理論が実践の問題を中心に据えるものであれば、それは文学研究が扱う主題ではなく、『季刊翻訳』のような翻訳に特化した雑誌で議論されるべき主題と見なされた可能性があるのではないか。

翻訳学校の設立や『季刊翻訳』の創刊が、英米文学研究の外部で翻訳実践を担っていく動きだったとすれば、3.3でも言及した1974(昭和49)年に設立された外国文学翻訳協会と、それが認定する外国文学翻訳士という資格もまた、同様の動きに含まれるだろう。この協会と資格について、『英語青年』誌上では「英学戯評」という欄で皮肉を交えた辛辣な発言が掲載された。長くなるが掻い摘んで引用する。

……「外国文学翻訳協会」なるものができて、その機関が年に2回、翻訳の資格検定試験をする、という話をきいた[中略]協会の定款というのがあって、それを見ると、まず文学の国際交流を目的として「これを実践するに必要な外国文学翻訳の優秀な人材を発掘し」、これに「広汎な活動の機会と場を与えるとともに、上記要請に応えるに足る技能の開発を行う……」とある。そしてその事業としては、まず「外国文学翻訳に関する総合的能力認定のための検定試験を行い」、その合格者に対して「外国文学翻訳士」という資格を与える。つぎに前記の資格取得者に対する技能養成、教育訓練を行なう。そして翻訳士はこの協会によって「広い活動の場と機会を提供」される、と謳っている。[中略]ところでこういう商売、いや、失礼、文化事業が成り立ついうところに、日本社会の特殊性がある。聞くところによると、外国文学翻訳の潜在的志望者は——大学英文科卒業

生、若い家庭の主婦も含めて——じつに無数にあるらしい。[中略]まず「翻訳はカッコいいアルバイト」、という迷信がある。おまけに日本には、「原典尊重」というたいへん都合のいい、おそらくシナ伝来の思想(?)があつて、誤訳のほうはやかましくいっても、訳文の拙劣、醜悪なことはそれほど目に角を立てない。したがって翻訳は外国語を少しかじってさえいれば誰にでもできることという、妙な通念ができています。言うまでもなく文学の翻訳は文学の仕事だ。もちろん語学ができなければ話にならぬとしても、いい翻訳が出てくる背景には、その訳者の文体に対する趣味、文学、人生一般への適切な洞察力——つまり大げさにいうとその人の全教養生活の質のよさというものがある。大学で英語を教えているから、自動的に翻訳ができるなんてことでは、絶対に有りえないのだ。[中略]この協会の定款の中には「外国文学翻訳活動における閉鎖性の打破」という勇ましく、かつ意味深長な言葉が出てきたのは、[中略]つまりこれは、外国文学翻訳界(そんなものがあるとするれば)の、一種の独占市場からはみ出した先生方の、いわばマーケット奪取をねらった合法的なぐり込みなのだ。[中略]だいたい、翻訳は文化的なアルバイト、という一般通念につけ込むのはよくない。それは翻訳というのを軽く見ている証拠だ。例えば英米文学でほんとうに信頼できるすぐれた訳者は、日本中に 20 人といえないのじゃないか。それほど文学の翻訳とはたいへんな仕事なのだ。二、三年間の技能養成でできることとは、全くわけがちがうのである。[後略]

(「〈英学戯評〉外国文学翻訳士」1973(昭和 48)年 121 巻 2 号 p.78)

〈戯評〉という欄に掲載された文章であることを考えれば、全てを字句通りに読むことには注意が必要かもしれないが、ここには当時の英米文学研究と翻訳をめぐる状況が端的に書き込まれているように見える。まず潜在的な翻訳志望者が英文科卒業生から主婦まで無数にいるという指摘がある。これは、1960 年代(昭和 30 年代後半)から生じ始めた大学英文科の大衆化という問題を背景とした現実だった。1961(昭和 36)年に『英語青年』に掲載された福原麟太郎の「英文科の問題」という記事によれば、高度経済成長に伴い、1959(昭和 34)年には全国 511 の大学・短大のうち 125 校に英文科が設置されており、全国の英文科学生やそこで教鞭を執る英文学研究者は膨大な数に上り、その状況にどう対応すべきなのかが問題となっていた(107 巻 12 号 pp.854-855)。この記事が契機となり、1962(昭和 37)年には福原と中島文雄が行った「文学部と英文科の問題」という対談(108 巻 6 号 pp.302-306)、翌 63(昭和 38)年にも成田成壽による「新英学展望—英文科の責任」(109 巻 5 号 p.250)が掲載された。いずれの記事においても、高度成長下で女子も含めた大学進学率が上昇し、大学は戦前のようなエリートや研究者養成の場ではなく、一般的、大衆的な存在になったことや、そのために実学として英語を学ぶことを求める学生達と研究者である語学教師とのギャップが生じる中で、英文学科の在り方が問題視されている。おそらく、英米文学研究がこうした大衆を意識せざるを得ない現実を経験していたからこそ、翻訳の受け手としての一般読者を志向する姿勢は生じたのだろうし、英語を学ぶ若者が増えて大衆化が進んでいたからこそ、研究の外部で翻訳者を養成する素地ができあがっていった側面があるだろう。しかし、そうした英

語の大衆化のもとで若者が安易に翻訳者を志望することに対してはこの戯評の著者は手厳しい。「二、三年間の養成でできることは、全くわけがちがう」と述べて、翻訳学校や資格試験を通じての翻訳者養成を批判している。

外国文学翻訳協会が「外国文学翻訳活動における閉鎖性の打破」を掲げたとも述べられているが、この文言自体、協会の設立そのものが研究主導の翻訳からの脱却を目指していたことを示唆しているように読める。これについても戯評の著者はブラックユーモアによって辛辣に反応している。大学で教えているからといって翻訳ができるとは限らない、と研究者による翻訳についても批判している側面はあるが、どちらかと言えば文学研究から離れて一般の人々が翻訳を志したり、研究の外部で翻訳者を養成しようとするに対しては苦々しく感じていることが窺える文章である。

もう一つ、翻訳が研究に牽引されるのではなく研究の外部にその実践の場を移していった背景として、古野ゆり(2002)が当時の時代背景との関連を指摘している。彼女は、高度成長期に開催された1964(昭和39)年の東京オリンピックや1970(昭和45)年の大阪万博といった国際的イベントを機に、職業としての翻訳に高い地位が与えられるようになったことを挙げ、これが専門的職業としての翻訳家を養成するための翻訳学校の設立の背景と見ている(古野 2002, pp. 115-116)。

以上のような研究と翻訳を取り巻く環境の変化もまた、翻訳が文学研究主導から離れ、読者としても担い手としても一般大衆を想定する状況の強化につながる大きな要因であっただろう。『季刊翻訳』と共振する視座を持っていた『英語青年』は、翻訳の大衆化と実践理論への眼差しを共有していたが故に、もはや文学研究とは異なるものとして翻訳を捉え、研究の土俵上で扱うことを避けて『季刊翻訳』のような実践を強く意識した媒体に委ねるべき主題と見なしていったのではないか。その意味で『英語青年』は、翻訳の多角的な研究を標榜した『季刊翻訳』から結果的には乖離していったということになる。こうして1970年代の『英語青年』においては、60年代から登場して徐々に増加していた学術的な翻訳論考が、それ以上の進展を見せなくなったと考えられるのである。

5. おわりに

以上のように、1960～70年代初頭の『英語青年』には翻訳に対する学問的な視座が研究として発展する素地が見られたにもかかわらず、翻訳実践が技術論や英米文学研究外部での翻訳者養成と関連を深めるにつれて、翻訳は文学研究が扱う学問的テーマから乖離していった。

1980年代に入ると、『英語青年』誌上では再び断続的にではあるが翻訳に関する論考が登場し、翻訳の特集号(「英米文学と翻訳」1981(昭和56)年132巻9号)や翻訳書評を通じて翻訳への高い関心が再び見られるようになる。その中には、『季刊翻訳』に寄稿していた別宮貞徳や中村保男、常磐新平らも含めた実践的な論考も含まれる。本稿では60～70年代に限定して論じたが、英米文学研究と翻訳論の相関をめぐる一連の流れを理解するためには、80年代以降の翻訳記事の内容についてもさらに検証していく必要があるだろう。

現在の日本でTSをカバーする学会である「日本通訳翻訳学会」は、1990(平成2)年に発足し

た「通訳理論研究会」という集まりから出発した¹²。実践への貢献を重視する通訳の研究の中に TS を念頭に置いた翻訳の研究が包含されてきたという日本の TS 発展の経緯¹³は、翻訳の研究が実践の学であるという認識が深く根付いていたことを示唆してはいないだろうか。また一方、英米文学研究の分野に目を向けても、原典重視の学術的姿勢が研究の大前提としてあり、翻訳がこの学問分野の主題として位置づけられることは一般的ではない¹⁴。こうした中で英米文学の翻訳を主題化し、それを TS という学問研究に依拠して成立・展開させていこうとするならば、研究と実践という視座の区別や、文学研究という隣接分野における翻訳観は無視できないだろう。日本における既存の翻訳論と TS を接合し、“日本の TS”を検証するためにも、関連する考察をさらに深化させることが今後の課題である。

※ 本稿は、筆者の博士学位取得論文「英文学翻訳の翻訳規範に関する一考察」(2008)の「第4章 昭和後半の英文学翻訳、英文学研究、社会思潮」4節および5節の一部を参照し、そこにさらなる考察を加え、大幅に加筆修正して再構成したものである。

【謝辞】

本特集に参加するにあたって、佐藤＝ロスベアグ・ナナ氏、コックリル浩子氏、内山明子氏らとの研究上のやりとりから多くの有益な示唆を得られたことに深く感謝致します。また、佐藤＝ロスベアグ氏には、本稿への詳細なコメントと助言を頂戴したのに加え、本特集に関するさまざまとりまとめ等の労を執っていただきました。心より感謝申し上げます。

【著者紹介】

佐藤美希 (SATO Miki) 札幌大学地域共創学群外国語学系准教授。専門は翻訳研究(特に日本における英米文学作品の翻訳研究)、イギリス文学、比較文学。連絡先: mikisato@sapporo-u.ac.jp

【註】

- ¹ 例えば、若林ジュディは日本の TS 研究者が必ずしも西欧の TS の成果だけに依拠するのではなく、日本の状況にそれが適応可能なのか検証し、西欧の TS に日本独自の知見を付与していくことを期待している(若林 2011, pp. 271-289; Wakabayashi, 2012, pp. 33-52)。
- ² 若松賤子のような研究者ではない翻訳者の例や、谷崎潤一郎のような作家が翻訳した例なども多くあるものの(井上 2011)、概して英米文学作品の翻訳は明治・大正・昭和を通じて研究者が研究の一部として翻訳も行い、翻訳への批評も行うという形で、翻訳受容を牽引してきた側面が大きいと考えられる。
- ³ 昭和7年からは福原麟太郎、同15年から成田成壽、21年から富原芳彰、26年から外山滋比古ら、著名な英米文学研究者達が歴代編集長を務めた。「年表:『英語青年』100年のあゆみ」『英語青年創刊100周年記念号』1998年8月別冊 pp.126-137 参照。

- 4 雑誌等への広告の見積もり情報を提供していた「広告ナビドットコム」というサイトによると、データの出所は明記されていないものの、『英語青年』のオンライン化直前の 2008 年の発行部数は約 4 万部、読者層は大学教師が 42%・英文科学生 34%と述べられていた。
(http://www.koukokunavi.com/info/media/mi_12.html 2008 年 9 月サイト閲覧。現在はアクセス不可)
- 5 『英語青年』以外でも、文学の翻訳をめぐる原文への忠実性と作品の芸術性とどちらを重視するべきかという議論はあった。例えば、1944(昭和 19)年から中国文学者の吉川幸次郎とドイツ文学者の大山定一が彼らの往復書簡の中で議論している。(『洛中書問』1946/1974)
- 6 佐伯は東大英文科卒業後、昭和 25 年にはガリオア留学生としてアメリカに留学した米文学者である。一方の宮崎は、後にディケンズ・フェロウシップ日本支部の初代支部長となる、日本のディケンズ研究の第一人者とも言える人物である。
- 7 『英語青年』上ではこの当時までほとんど見られなかったが、一般読者への文学の普及と啓蒙を意図したと考えられる昭和初期の円本全集には既に、研究者による翻訳は読みにくいために全く新しい新訳・改訳が必要であると主張されていた。(例:新潮社『世界文学全集 月報』13 号 p.7)
- 8 テクストタイプ論とは、翻訳されるテキストのタイプによって、そのテキストではどのような言語機能が優勢となるべきか、どのような訳出方法が優先されるべきかが決まると考える理論である (Reiss, 1971/2000; 藤濤 2007, pp.18-25)。スコポス理論では、翻訳とは TT を介して翻訳者が ST を翻訳の想定読者に伝えるコミュニケーションと理解され、翻訳がどのような目的—スコポス(ギリシャ語で「目的」を意味する)—で想定読者に提供されるのかが重視される (Vermeer, 1989/2004; 藤濤 2007, pp.25-31)。日本でも藤濤(2007)がこの理論を詳細に紹介し、具体的な翻訳研究の方法として提示している。
- 9 ナイダの理論は、チョムスキーの生成変形文法の影響を受けて言語科学として翻訳の方法を理論的に体系化しようとしたものである。まず訳出過程を起点言語の分析、転移、目標言語への再構成という段階に区別し、「分析」段階においても分析内容を四つの機能に分類するなど、実際の訳出過程を体系化した。さらに、起点言語と目標言語の「等価」を実現するために、語形や文型などの等価を求めるのではなく文章のメッセージが起点言語でも目標言語でも同じように、目標言語であっても自然な言葉で受容されることを目的とした「動的等価 dynamic equivalence」を提唱し、そのための方法論や理論を提起した。(Munday, 2012, pp. 61-69)
- 10 瀧口は著名な英文学者。荻田は上智大教授のアメリカ文学者。佐藤は共立女子大教授で翻訳者としても有名。田村は詩人、翻訳者として活躍した人物。新庄もフランス文学者で早稲田大教授、鈴木は北大教授でアメリカ文学者。児玉は学習院大教授の英文学者。
- 11 この対談から読み取れるのは、外山と内村がそれまで研究者たちが前提としていたような「原文忠実主義」(p.13)の翻訳観とは異なり、日本における異文化受容態度の問題として翻訳を論じているということである。彼らはロシアやヨーロッパの言語文化や翻訳に言及しながら、日本人にとって翻訳はどうあるべきか、本質的な意味での翻訳の意義を論じている。その文脈の中で、原文テキストへの忠実性に拘るのではなく、外国語の読めない読者にどのように異文化のテキストを提供するのかという観点から、一般読者重視の翻訳観が展開されている。

- ¹² 日本通訳学会ウェブサイト内「沿革」<http://jaits.jp/home/history.html> 参照 (2015 年 7 月 1 日閲覧)。1990(平成 2)年に発足した「通訳理論研究会」が 2000(平成 12)年に「日本通訳学会」へと発展し、その学会内部に翻訳の学術的研究も牽引すべく「翻訳研究分科会」が 2005(平成 17)年に設立された。その後、翻訳の研究も正式に学会が担う学術研究に含めることを意図して 2008(平成 20)年に同学会の名称が「日本通訳翻訳学会」に変更されたという経緯である。
- ¹³ 2007(平成 19)年に「日本通訳学会 翻訳研究分科会」の編集として発行された『翻訳研究への招待』第 1 号の「まえがき」で、水野的は「2000 年 9 月に日本通訳学会が設立されてから、学会誌『通訳研究』に徐々に翻訳研究の論文が掲載されるようになるが、それはあくまでも通訳研究に付随する翻訳研究であるにすぎなかった」(水野 2007, p.1)と述べている。
- ¹⁴ 近年は特に米文学研究者の中から人気の高い翻訳者(例えば柴田元幸、藤井光など)が現れているなど、研究内部でも英米文学をめぐる翻訳への関心は継続的に高いと思われるが、そうした状況下でも翻訳が学術論文のテーマとなることは稀である。現在の日本の英米文学研究を代表すると考えられる学会誌『英文學研究』『英文學研究 支部統合号』(日本英文学会の機関誌)を見ても、この 5 年間で翻訳を主題にしている論文の掲載は、わずか 1 編のみ(大久保 2013, pp.155-162)である。

【引用文献】

- Chesterman, A. (1997). *Memes of Translation*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Munday, J. (2012). *Introducing Translation Studies* (3rd edition). London and New York: Routledge.
- Reiss, K. (1971/2000). *Translation Criticism – The Potentials and Limitations* (E. F. Rhodes, Trans. from German to English). Manchester: St. Jerome.
- Takeda, K. (2012). The Emergence of Translation Studies as a Discipline in Japan. In N. Sato-Rossberg and J. Wakabayashi (eds.), *Translation and Translation Studies in the Japanese Context* (pp. 11-32). London and New York: Continuum.
- Vermeer, H. (1989/2004). Skopos and commission in translational action. In L. Venuti (ed.), *The Translation Studies Reader*, 2nd edition (pp.227-238). London and New York: Routledge.
- Wakabayashi, J. (2012). Situating Translation Studies in Japan within a Broader Context. In N. Sato-Rossberg and J. Wakabayashi (eds.), *Translation and Translation Studies in the Japanese Context* (pp. 33-52). London and New York: Continuum.
- 土居光知他監修(1968)『日本の英学 100 年 昭和編』研究社
- 藤濤文子(2007)『翻訳行為と異文化間コミュニケーション—機能主義的翻訳理論の諸相—』松柏社
- 古野ゆり(2002)「日本の翻訳:変化の表れた 1970 年代」『通訳研究』2 号:114-122.
- 井上健(2011)『文豪の翻訳力—近現代日本の作家翻訳 谷崎潤一郎から村上春樹まで』武田ランダムハウスジャパン
- 水野的(2007)「まえがき」『翻訳研究への招待』(pp. 1-2) (日本通訳学会翻訳研究分科会編)
- 大久保友博(2013)「ロスコモン伯『訳詩論』と翻訳アカデミー」『英文學研究 支部統合号』第 5 巻:

155-162.

佐藤美希(2006)「雑誌『英語青年』に見られる明治・大正の英文学翻訳規範」『Savage 北海道大学大学院国際広報メディア研究科院生論集』第3号:48-59.

佐藤美希(2008a)「英文学翻訳の翻訳規範に関する一考察——『英語青年』誌に見られる英文学研究、及び社会思潮との関係から」(学位取得論文・北海道大学)(未刊行)

佐藤美希(2008b)「昭和20年代の英文学翻訳と英文学研究——『英語青年』誌における翻訳規範の形成とそのコンテキスト」『国際広報メディアジャーナル』第7号:119-144.

佐藤=ロスベアグ・ナナ(2014)「共振と呼応——1970年代日本における Translation Studies の芽生え」『みすず』2014年11月号:6-13.

若林ジュディ/高田アミツ裕子(訳)(2011)「日本におけるトランスレーション・スタディーズの位置づけ——より広い視点から」佐藤=ロスベアグ・ナナ(編)『トランスレーション・スタディーズ』(pp. 271-289)みすず書房

吉川幸次郎・大山定一(1946/1974)『洛中書問』筑摩書房

『英文学研究』(日本英文学会)第87巻(2010)—第91巻(2014)

『英文学研究 支部統合号』(日本英文学会)第3巻(2010)—第7巻(2014)

『英語青年』10巻13号(1904.1)—11巻15号(1904.7)、14巻1号(1905.10)—158巻12号(2013.3)

『季刊翻訳』No.1(1973)—No.7(1975)みき書房

『青年』No.1(1898.4)—No.5(1898.8)、10巻12号(1903.12)、12巻1号(1904.9)—13巻19号(1905.9)[1979年に英語青年復刻版刊行会より復刻版出版]

『世界文学全集 月報』第13号(1928年4月15日)新潮社

広告ナビドットコム http://www.koukokunavi.com/info/media/mi_12.html 2008年9月確認(現在アクセス不可)

年表・『英語青年』100年の歩み(『英語青年』ウェブサイト内)

http://www.kenkyusha.co.jp/uploads/03_webeigo/sei-nen.html

2015年7月1日確認

日本通訳翻訳学会ウェブサイト <http://jaits.jpn.org/home/index.html>

2015年7月1日確認